

「東高野街道との交差点に立つ2つの道標」

2つの道標



中垣内浜公園から東に100メートルほど進むと、古堤街道は南北に走る東高野街道と交わります。高野街道は、古くから京都・大阪と和歌山の高野山を結ぶ参詣道として利用されてきた道で、京都府八幡市を起点とする東高野街道や、大阪市平野区を起点とする中高野街道、堺市を起点とする西高野街道などがあります。このうち東高野街道は、生駒山地のすぐ山際を通る道であったことから、「山の根の道」とも呼ばれました。

交差点のすぐ東には、古堤街道を挟んで南北両側に2つの道標が立っています。北側の道標は全体の3分の1ほどが地中に埋まっているため、全ての文字を読むことはできませんが、「龍間山不動尊 コレヨリ東十八丁」と刻まれています。ここから約2キロ先にある龍間不動尊を示す道標だったことが分かります。南側の道標は、江戸時代後期の嘉永2年(1849)3月に建立されたもので、西側の面には「右大峯山道上道」北側の面には「すぐ京 乃ざき やわた 柳谷道」などの行き先が刻まれており、2つの街道が交わるこの場所が、京都や野崎観音、石清水八幡宮(京都府八幡市)、柳谷観音(京都府長岡京市)、大峯山(奈良県吉野郡天川村)など各地に向かう人々が往来する交通の要所であったことがうかがえます。また、道標の台座には地元元の若中(現在の青年団に当たる組織)と、製作者で

ある日下村(現・東大阪市)の石工の名前も刻まれています。

道標の場所から80メートルほど東に行くと、古堤街道はジグザグにカーブを描きながら、次第に坂道に入ります。かつて「中垣内越え」ともいわれたこの坂道は、大阪から奈良方面に向かう人々で大変にぎわった道でした。次回からは、中垣内越え周辺の史跡について紹介します。

(生涯学習課)



嘉永2年の銘のある道標(南側)



龍間不動尊への道標(北側)

「覚順寺」

「一体の本尊を安置する寺院」



古堤街道と東高野街道との交差点から東へ行くと、次第に中垣内越えの急な坂道に入ります。坂道を東に300メートルほど登り、中垣内第一児童遊園地を過ぎると、右手に真宗大谷派の青龍山覚順寺が見えてきます。覚順寺の創建は明らかではありませんが、室町時代後期に蓮如上人から名号(「南無阿弥陀仏」の字を紺や紙に書いて表装したもの)を与えられた弟子が、これを本尊とする遺物を中垣内に構えたのが始まりだと言われています。その後、江戸時代前期の寛永18年(1641)に釈了空法師によって寺院として整備され、新たに東本願寺から与えられた阿弥陀如来木像が本尊となりました。

昭和9年(1934)に再建された本堂には、本尊のほかにも、七高僧像、聖徳太子像、親鸞聖人像、蓮如上人像などの寺宝が並んでいます。また、本尊の右

手には、かつて野々宮(平野屋新町から野崎1丁目付近)にあった深広寺の本尊が安置されています。深広寺は、江戸時代中期に深野新田に移り住んだ東本願寺の門徒集団・河内二日講の仏事が行われていた寺院でした。深広寺は、明治18年(1885)の大洪水によって流失しましたが、覚順寺の住職が本尊を救い出し、客仏として本堂に安置したそうです。河内二日講の仏事は、今でも毎年春と秋に回深野新田の各地区の持ち回りで行われており、覚順寺は野々宮や太光田(北条1丁目付近)、平野屋地区などに住む講員の檀那寺として関わっています。

古堤街道からは少し離れますが、覚順寺から南に150メートルほど行くと、須波麻神社の参道に出ます。次回は中垣内の氏神・須波麻神社について紹介します。

(生涯学習課)



深広寺の本尊



覚順寺の本尊



覚順寺の外観